

同性カップルの生活と関係性の計量分析の試み  
——法律婚・事実婚との比較から——

○釜野さおり (国立社会保障・人口問題研究所)、  
神谷悠介 (中央大学)、コーダイアナ (法政大学)

近年の日本の家族社会学において、同性パートナーシップあるいは同性カップルは、周縁化されているものの、無視できない存在として扱われているようにみえる。しかしながら、性的マイノリティと家族に関する実証的研究の蓄積は乏しい。特に同性カップルの生活実態や関係性を明らかにしようとする研究は数少ない。そこで、本研究グループでは、日本で暮らす同性カップルの量的研究を進める第一歩として、インターネット調査を行った。本報告ではその結果を一部紹介しつつ、同性カップルを含む量的調査で遭遇する困難にも言及する。

■**先行研究** 同性カップルを正面から取りあげた初期の研究として Blumstein & Schwartz (1983)の *American Couples* (Pocket Books) が挙げられる。38 頁の調査票調査と、踏み込んだ聞き取り調査を併用した研究で、権力関係や生活実態を明らかにするため、結婚した男女、同棲している男女、同性カップルの男女を含め、法律婚であることや、「男女」であることで生じる違いにも着目した。同性間関係に特化したものには Carrington (1999)の *No Place Like Home* (Univ. of Chicago)、Weeks et al. (2001)の *Same-sex Intimacies* などが代表的である。量的研究もシビルユニオン登録の有無による関係性の比較 (Solomon, et al. 2005) (doi.org/10.1007/s11199-005-3725-7)から、世代とジェンダープロジェクト (GGP) の無作為抽出調査データを用いた国際比較 (van der Vlieten, et al. 2020) (DOI: 10.1080/1550428X.2020.1862012) に至るまで、多様な研究がある。

日本の同性カップルの生活を描く研究でもっとも系統的なものは神谷 (2017) の『ゲイカップルのワークライフバランス』(新曜社) であろう。Kamano (2009) (doi:10.1016/j.wsif.2009.03.001)の女性カップルの家事の研究や、女性カップルの生活実態から法的ニーズを析出した杉浦・釜野・柳原 (2008) (<http://id.nii.ac.jp/1073/00004684/>) 等もあるが、全般にカップル関係の研究は未開である。近年ではパートナーシップ制度の文脈での調査や、育児や子育ての実態や意識の量・質的調査もみられるが、関係性と生活を中心に据えた量的調査は行われていない。

■**カップル調査の概要** 2022年3月後半に、大手インターネット調査会社のアンケートモニター登録者を対象にスクリーニング調査を行い、20~69歳で配偶者・パートナーと同居している法律婚男性・女性、事実婚男性・女性、同性カップル男性・女性のそれぞれの性別・カップル群について515の回答(事実婚男性のみ517、合計3092)を集めた。同性カップル以外は各年代が100回答を目標に割り付けを行った。調査では家事分担、家計管理、消費行動、コミュニケーション、対立とその解決方法、家族・職場との関係、子ども、コミュニティとのかかわり、仕事、余暇、パートナーシップの法的承認についての考え等をたずねた。アメリカの70年代に作成された Blumstein & Schwartz (1983)で用いた調査項目から取捨選択し、日本の今日的課題を捉えるものを追加した。

■**結果** 家事分担に関しては、12項目を1=いつも私がやる、5=ふたりが同じくらいやる、9=いつもく夫・妻・パートナー>がやる、の9段階尺度でたずねた。平均値を性別・カップル群で比較すると、「家や家の中のモノの修理」については、事実婚男性3.39、法律婚男性3.74、同性カップル女性4.32、同性カップル男性4.39、法律婚女性4.73、事実婚女性5.19である。相対的に男女カップルの男性は回答者が、女性は相手の男性が多くやる傾向がある。「夕食の支度」の平均値は、法律婚女性2.19、事実婚女性2.80、同性カップル女性4.18、同性カップル男性4.42、事実婚男性6.20、法律婚男性6.98で、男女カップルの女性は回答者自身が、男性は相手の女性が多く担うカップルが多い。ふたりの間での影響力については15項目を挙げ、1=すべて私の影響、5=ふたり同じくらいの影響、9=すべてく夫・妻・パートナー>の影響、の9段階尺度でたずねた。「誰がどの家事をするか」について回答者の影響が大きいのは、順に、法律婚女性3.44、事実婚女性3.80、同性カップル男性4.47、同性カップル女性4.55、事実婚男性5.22、法律婚男性5.47である。いずれについても同性カップルの平均値は、男女カップルの男女の中間にあり、分担や影響力の偏りが相対的に少ない可能性がある。当日は、女性回答と男性回答の違いや、カップルタイプによる違いの分析結果を報告する予定である。

\*本研究はJSPS 科研費19H01571による助成を受けたものである。

(キーワード、多様な家族のかたち、性的マイノリティの家族関係、同性カップルと異性カップルの比較)